如何にして初三郎式鳥瞰圖は生れたか？

吉田初三郎

曾つて大阪時事新報社の需めにより、近世鳥瞰圖苦心談と題して私の過去の經歷、鳥瞰圖創案の動機と經過、現在の希望と抱負、將來に對する理想などを述べてみた事がある。私は更に本誌上に於て、表題の如く、如何にして初三郎式鳥瞰圖が生れたかを皆さんの前に書いてみる事にした近頃屢々、私の畫く名所圖繪に就いて、どうして其んなものを描くやうになつたか、またいつたい何んな動機であんな描法を編み出したのか、其の動機や生立ちをきかせてくれと、可なり各方面からの御質問があるのであるが、其れにお答へするためには、事の順序として、勢ひ私が畫家として、そもそもいかなる志しを以て生れ又どういふ覺悟を以て歩んできたか、先づ夫れをお話しなければならない。

私は幼少の頃、まだ六つ七つの時分から畫のすきな少年であつた。思ひ出せば其の頃小學校の教科書には、德川末期の巨匠として、藝術界を風靡した圓山應擧の逸話などがのせてあり、小供心にも彼が一匹の野猪を寫生するために少からぬ苦心をしたといふ物語などが深く腦裡に印象されて自分も將來は必ずと立派な畫かきになりたいと念じてゐたのであるが、運命は容易に夫れを許してはくれず、或る時は友禪圖案の繪師の家に丁稚奉公をつゞけ、又或る時は京都三越の友禪圖案部に、日給四十五錢の職工となつて、少青年期の前半を過す等、第一義的志望を、ジッと押へ忍ばねばならぬ時代もあつたのである。

其後、單身東京に出て、今日洋畫界の母體とも云ふべき白馬會の研究所に入り、又鄕里京都に歸臥しては、恩師鹿子木孟郎先生の門に入つて、茲に漸く素志の正道を踏むを得たのであつた。是れが私の鳥瞰圖創案以前の、總ての經歷である。

◇

一體、自分で自分のことを彼れ是れ言ふのは如何にも片腹痛いことで、其れも自分の暗い方面を思ひ切つてさらけ出すのならまだしも、其れと

反對に、自分の明るい方面、たとへば長所とか得意とか苦心とか云ふものを、人前にさらけ出すことは、心ある者の甚だ潔しとしない所である が、今私が述べんとすることも、矢張り私の理想・希望・抱負と云つた樣なもので、其れに伴ふ苦心、長所、忍耐なぞいふ美しい明るい方面のことが多く、僅かばかりの技術と、取るにも足らぬ些少の名聲とを以てしては、何とも心苦しい次第である。而し拙いながら私の仕事には理想も自信も抱負もあつて、假令よそ目には自惚れと思はれても、私の生命の總てを打込んでしてゐることであるから、夫れを聊か申上げてみたい。

過去十七箇年間、私が懸命の努力と希望とを打込んで來た事業は日本全國名所圖繪の完成といふ仕事である。而も之れは遂に私一代を以て完成し得べくもなく更に五十年百年の星霜を經て、初めて後世の人文史上に多少とも貢獻する所あるべきを固く信じてゐるものである。私の此の仕事に對しては、既に充分の理解と同情とを持つて、常に多大の後援と激勵とを賜つて居る方々もあるが、併しまだ、之れに就いて全く理解を給はるを得ない方々もある。で、私は爰に聊か自分の仕事の說明をして諸賢の御一顧を給はりたいと思ふのである。

私の仕事……日本全國名所圖繪の完成といふことを簡單に申上げれば、彼の有名な東海道五十三次の繪の作者、一立齋廣重のしたあとを現在に活かし、更に是れを綜合して一幅の圖繪となし、今日の畫家が時代のお蔭で有し得る洋畫と日本畫との渾化の上に基礎を置いて、是れに色彩、描線、圖樣を働かせ、眞に特色ある近世名所圖繪を完成し、之れを後世に傳へて大正昭和時代に生れたる日本特有の藝術としての存在を示し、人文史上に明白な印跡を遺したいといふのである。

從つて私獨特の鳥瞰的描法は或は當世の畫壇に容れられず寧ろ異端者として蔑視せられてゐるかもしれぬ。されど私が創始執筆して以來茲十數年間に於ける鳥瞰的圖繪の流行利用、駸々として止まるところなきを見ても其の實際的効果の如何に素破らしいものであるかを明白に物語つているのであるそこに時代の變遷がある……。曾ては駕籠にゆられ彈臺にてわたりし東海道に、鐵路成り、鐵橋なり、隧道成り、更に自動車の、めまぐるしくも、さかんなる活躍を見るにつけ、私はこゝ五十年を出でずして、必ず飛行機萬能の時代の來るべきを確信してゐる、其時に於て曾て地上に殘されたる交通狀態を如實に物語るものは、我が鳥瞰圖にあらずして何ぞ。蓋し現代に於ては名所と交通の關係を示して旅行者の便益に資し、併せて交通の發達と改善とを促しつゝ、以て百年の後に光彩を期するもの、恰も一立齋廣重の畫風夙年振はず、風景畫の新機軸を樹立するに至つて次第に民衆の喝采を博し、後世に尊重せらるゝ其の軌を同じうせるものではあるまいか。

然し廣重と私とは、其の軌を一つにせるも其の出發點と目的とを異にしてゐる。以下前述の概念に就て多少の說明を試みたいと思ふ。

（一）鳥瞰圖の流行宣布と其の出發の動機

時代の變遷と共にあらはれた樣々な社會現象の中には、隨分顰蹙すべき風潮もあるが、又大いに尊重すべき風習もある。中にもスポーツ熱の勃

興に伴ふ、スポーツマンシップの養成は、其の善導よろしきを得た時、必ずや從來の武士道にとつて代るべき重大な使命を帶びたものである。又是れと併行して都人士間に喧傳さるゝ旅行熱は一面繁雜な生活から離れて大自然に親しみ、精神の休養を計つて事務の能率を速進せしめる妙藥であると共に、一面交通智識の普及となり、歴史地理の趣味ある實地見學となつて、甚だ結構な流行の一つであると思ふ。私は自分の天職として、絶えず日本全國に寫生旅行をつゞけ、殊に昨年は前後半年に渉つて、滿蒙、南支、朝鮮の踏査寫生をこゝろみた事であつたが近年殊に目立つて、全國至る所、津々浦々に至るまで流布され、重寶がられてゐるのは、例の鳥瞰的案内圖である。私は是れを見る毎に、其の作者の誰人であるを問はず。何とも言へない懐しさと涙ぐましいほどの嬉しさを感じるのである。丁度里に出した愛し兒に絶えて久しく邂逅ふやうな心持で、私のまいた一粒の種が、いつか亭々と茂りつゝ、あまたの若木にとりまかれてゐるのを見る、其の造林の喜びである。

私が旅行先で、一葉の鳥瞰圖を手にしつゝ、此の喜びに浸つてゐる時、油然として思ひ起すは、私に此の一粒の種を與へて下さつた恩師鹿子木孟郎先生の慈訓と、一握の生命を惠み賜はりし畏くも尊き　今上陛下の御言葉とである。

◇

夫れは今から十七年前、大正元年のことである。これよりさき私は東京赤坂溜池なる白馬會研究所を出て日露戰爭に出征し、滿蒙の野に轉戰しつゝ無事凱旋後、鄕里の京都に歸臥して鹿子木先生の門に入り、再び繪筆の修練をとる一方、溜池當時の同窓で京阪に在住した、野田九浦、近藤浩一路、松田俊夫、宇和川通喩氏等の面々がこしらへてゐた溜池會とも往來し、又一方では泉鏡花、喜多村緑郎、上田敏、柳川春葉、北島春石、大平野虹諸氏等の贊助の下に演藝雜誌の發行を目論見、或は當時京阪で既に一家をなせる洋畫界の人達が集つてゐた双鳩會に加はつて、矢崎千代二君や松田俊夫君等と一緒に幹事などをしてゐた時分のことである。

鹿子木先生は第二回の佛蘭西遊學から歸朝せられてまもない時であつたが、一日私を膝下に呼んで曰はれるには

『自分は長らく佛蘭西にゐたが、あちらでは廣告や、辻々に貼るビラなどは、皆一流の大家の畫くもので、大家の畫いたといふことは其の商品の内容を示してゐると云ふことになつてゐる。然るに日本では夫れと反對で、美術家が民衆のために何かするのを非常な恥辱と思つてゐる。廣告とか看板とか案内とか云ふ、直接國民の藝術眼に訴ふべきものを、無智な低級なペンキ屋や畫工に一任して顧みないのは甚だ誤つた考へではあるまいか。夫れに洋畫家は日本畫の後進とは違つて、學費の支給にも困難を感じてゐる折でもあるから卒先して洋畫界から社會の爲に働く應用藝術家の出るやうに其道を啓かなければいけない。自分はつねに此事を考へてゐたけれどまだ人才を得なかつたが、幸い君には一片の熱誠もあり努力もある。又圖案背景等を書いた經驗もあるのだから、此の方面の仕事には最も適した人だと思ふ。何うだ、社會のため一つ君が洋畫界から出て此の仕事を始めてみては……。』とかういふお話であつた。

今でこそ此の御言葉は、私にとつて天來の福音ともみるべき尊い慈訓であるが、其當時私は實に悲しかつた。折角純正藝術を志して精進してゐる私にペンキ屋になれと云ふのである。然し先生の年來の恩誼に對しても、私は奮つて先生のお考へを實現するといふ決心をして

『友よお前は右へゆくか、俺は獨りで左へ行くぞ』

と、悲壯な覺悟の下に、斷然として過去の世界と手を別ち、茲に民衆藝術の別天地を創造して、いよ〳〵街頭へ打つて出ることになつた。

此時に當り有難くも懇篤なる贊成の意を表して、身に餘る推薦狀を賜はり、私をして華々しく世間へ送り出して下さつた方々こそ、京都商業會議所會頭澤岡光哲氏、當時の京都市長川上親晴氏、同高級助役加藤小太郎氏、並に京都帝國大學法學博士神戸正雄氏、同末廣重雄氏、文學博士深田康算氏等で特に種々な便宜を與へて下さると共に、恩師鹿子木先生は、事業に對する社の顧問となつて下さつたのである。之等諸名流は、實に今日に至るまで私の忘るゝことの出來ない、私の事業の擁護者であり督勵者であると共に、其時給つた御推薦の一字一句は、終生牢記すべき金玉の文字であつたのである。

其時の仕事としては、實業界に有名な下村正太郎氏の依囑をうけて、京都大丸三階樓上に兒童室の壁畫として周圍二十間の大作お伽づくしを描いたことや拓殖博覽會の天井畫、壁畫、さては枚方菊樂園の大背景を書いた時など、今の近藤浩一路君等が大いに助手として働いてくれたものであつた。

さて此の經營中に、京阪電車の專務太田光凞氏から、京阪沿線の名所圖繪を描いてくれといふ依賴をうけた。それは大正二年も春まだ淺い頃でうら寒い淀の川風に吹かれながら、外套の襟を聳てゝ幾度か自分の將來に就て嗟嘆しつゝ、兎も角寫生をすまし・脆くも倒れやうとする自分を、恩師の訓言に鞭撻して遂に其の圖を新式なヌーボー式圖案風に獨創して完成した。が、是れは單に描いたといふだけのことで、自分としては何等の感興も持てなかつたのである。圖らざりき、之れが私の今日の事業の筆初めとなり、處女作にならうとは。

◇

大正二年は亡友久佐木義房と共力して京都に女子美術學校創立の奔走に暮れて、明くれば大正三年其の夏私はこもすれば、鈍り勝な心を引立てて九州耶馬溪に寫生旅行をこゝろみ、溪中の古刹羅漢寺指月庵に滯宿し、自己信念の安んぜざる、常に沈思輾轉して山溪の雨聲に對し

五月雨や、指月庵裡のふる行燈

の一句をよんで、轉た人生の寂莫に堪へ得ざりし折柄、京阪電車太田氏より飛檄あり、曰く……

『今回、皇太子殿下(今上陛下)本社沿線男山八幡宮へ行啓あり、貴賓電車内に貴殿揮毫の名所案内を備へ置きたる所、殿下には親しく御手に取

らせ給ひ、畏くも『是れは奇麗で解り易い、東京へ持ち歸つて學友に頒ちたい……』との尊き御諚、早速數部獻上したるに殿下には殊の外の御喜びあり、本社の光榮之にすぎず、貴下のためにも光榮餘りあるものなれば、取り敢ず是れを通知する……。』といふ意味の來信であつた。

此の飛信に接した私は、指月庵の一隅に、端坐瞑目して、感慨無量、深く〳〵自己の内心に顧みて靜かに考へたのである。自分のやうな不束な者の仕事が、思ひもかけず殿下の御感賞にあづかるとは光榮此の上もないことである。初めはあんなつまらない仕事と思つたが、是れは何だか無意味なことではなささうだ。よし！一つ日本全國の名所圖繪、否朝鮮、滿洲、世界中を、此の名所圖繪に描きあげて、不朽の仕事としたらどうだらう。此の仕事を完成するといふことは、幼い時に深く胸中に刻みこんだ『虎は死して皮を殘し、人は死して名を殘す』といふ考へと一致しはしないか。私は茲に現代の名所圖繪を殘して、後の世に當年の名所と交通の關係と發達の狀態を傳へたならば、一つには人文史の材料ともなり、一つには當代特有の名所圖繪といふ一種の藝術を示すことも出來やう、ここう考へたのである。

と同時に、電光の如く私の腦裡にきらめいたのは『奇麗で解り易い』といふ　今上陛下の御言葉である。今日に至るまで、私は私の仕事の大切な標語として、此の玉旨を奉戴してゐるもので、此の御言葉こそ、實に私の一生を決定する唯一の動機となつたもの、顧みて　聖恩の無窮を思ふ時、感激の涙滂沱として私の双頰につたひ、誓つて名所圖繪のために生き、名所圖繪のために死すべきを期して聖恩の萬分の一に報い奉るべく、即圖繪報國の決意を、此時深く心中に樹立したのである。

二　創作當初の鳥瞰圖と其の經過

かくして私は望洋たる日本全國名所圖繪完成の大理想に向つて其の第一歩を印したのであつた。私の考へでは、名所圖繪の生命は飽まで自然を巧に捕へて、自家藥籠中のものとなし、一目してその美しき山容水態を髣髴せしむる所にあり、幾何學的な測量圖や平面圖は、專門的以外に其の眞價の甚だ少いのを言明して憚らないものである。即ち萬人が見て樂みながら解り得べきもの、之れが即ち私の作品の生命とする所であり　陛下の御言葉以來、私の藝術に對する信條となつたものである。此の私の考へが正しいか正しくないか、私は之を滿天下に公示してその批判を乞はんとしたのである。

廣重の名所圖繪は名高く、又不朽の作品である。然し廣重はまさか生前に後世の爲なことは思つてゐなかつたらう。たゞ有りのまゝの風光景觀を筆にしたに相違ない此の卒直にして大膽な自然描寫が當時極めて人爲的で巧緻を極めた浮世繪の中に立つて、次第に特異な光彩を放ち、其れがまた今日の人文史に大變貢獻してゐるのではないか。然し私の作り出さんとする名所圖繪は單なる一枚のスケッチではなく、幾十枚幾百枚のスケッチが集つて其處に一個の鳥瞰的圖繪を構成せんとするのである。即ち部分々々に就ては飽まで忠實な自然描寫であるが、一度是れを綜合する時

に於て、極めて人爲的となり初三郎式となる。つまり私の個性が十分に畫面に溢れてゐるのである。既に廣重とは其の出發點を異にし、目的を異にする以上、是れは當然來るべき歸結として深く認識さるべきである。かくして吉田初三郎が創り出す近世名所圖繪の眞價は蓋し未知數とは言へ、胸中已に勝利の光明が脈々として波を打つてゐたのである。勿論創生當時の作品と、現在の作品との間には相當の距離と成長の相違があるが、夫れはスチブンソン發明當時の機關車と、現代の機關車との相違であつて、其の根本的思想に於ては毫末の變化もなく、單に色彩、描線、構圖に於ける改善進歩であり、是れは今後共、何處まで押し進めてゆくものか、私すら見當がつかないのである。

◇

さて現在に於てこそ私の創始開發した鳥瞰的案内圖は、洽く天下に流行宣布されて、見渡せば津々浦々のはてまでも、その名所案内、交通指導の智識として、官衙に、驛店に、旅館に、溫泉に、或は市井の十字街頭に、巧拙こりぐ、其の健かな成長と活躍の足跡を見るのであるが、翻つて創始當初を思へば全く今昔の感に耐へないものがある。此の新らしく出現した異樣の案内圖は、當時平面圖や測量圖を見なれた人の理性に訴へるべく、餘りに調子の高すぎたゝめか、是れを 陛下の如く『綺麗で解り易い』と認めて下さる方は殆どなかつたのである。全く何度繰返しても有難いのは、此時の 陛下の御言葉である。

然し天下は廣い、やがて鳥瞰圖の認められる時が來た。夫れは大正三年、大阪商船會社要路の人々が、私の仕事に深き理解を持つて激勵聲援せられ、當時別府航路のクイン(初代)紅丸(現在は二代目)を中心として、耶馬溪、宮島、寒霞溪、道後溫泉、琴平、高松屋島、別府溫泉等の名所圖繪を順次公表するに至つたことである……吁!此時の感謝こそ私が永久に忘れ得ぬ深い〳〵印象となつたのである。就中、道後溫泉圖繪製作の依賴者、日本の伊豫絣王として名聲を世に膾炙さるゝ立志傳中の人、田内榮三郎氏が、『何んでもかまはぬ、日本一と云はるゝ人が好きだ』との一言は、私を又新に鼓舞し決心せしむるに、どのくらゐ力强い響きがあつたことか。

この前後に於て、私は二人の恩人を得た。そして限在に至るも變らぬ愛撫と親交とをつゞけて、常に激勵指導の任に當つて頂いて居る。即ち一人は最近まで東京市電氣局長として令名あり、當時鐵道省勅任の大官宙堂生野團六氏、今一人は別府溫泉の民衆外務大臣といはるゝ鶴の井ホテル社長油屋熊八氏である。

◇

かくの如く、私の身邊には次第に知己の名士を得るに至つたのであるが、まだ〳〵普く世間に私の仕事を理解して頂くまでには至らなかつた。其の後凡そ七年間あらゆる困苦艱難と戰ひ常に貧窮をたへしのびつゝ其名所地開發進展に効果あるを力說宣傳の折から、始めて政府當局に見出されて執筆したのは日本より鮮滿への交通鳥瞰圖であつてそれは當時未だ鐵道院と呼ばれてゐた頃の交通宣傳ポスターであつた。これが即ち大正七

年であり、以降大正十年、私が鐵道省の命を拜して『鐵道旅行案内』の挿繪全部を揮毫するため、日本全國に寫生旅行をこゝ少みるまで、思へばながかりし幾星霜の憂き歩みよ或時は涙しつゝ名所圖繪の永遠性を說き、或時は活動俳優そこのけの冒險と輕業を演じつゝ、大自然の踏査に當り、朝に東方の俠に訴へ、夕に南國の知己を說いて、つぶさに人生行旅の苦しみと、藝術生活の悲慘とを味はひつゝ、孤影瓢然として南船北馬の旅をさまよひつづけたのである。

この記憶すべき創世紀時代の追懷の中には可なり面白い足蹟も有る、今その一つ二つを示すならば、大正四年には大正天皇御即位の大典を京都に行はせらるゝに當り、島華水博士の指導を得て京都全市鳥瞰圖作成の大任を遂げ時恰も內外貴紳の入洛するに及んで、其の稱讃を一身に聚むるの光榮を得、面目此上もなき次第であつたが、これ即ち近世日本に於ける大都市バーズ・アイ・ビューの嚆矢となつたものである。

又大正八年には、北海道に開道五十年記念博覽會の開催されしを機として、札幌鐵道局の命を拜して全道交通鳥瞰圖作成のため、北海の山野を跋渉し、人跡絕えたる狩勝の深山を攀ぢ登りつゝ、一面白皚々たる雪を踏みしめ、猛獸の眼を恐れつゝ、寫生に從事、更に翌大正九年には、引つづき樺太交通鳥瞰圖を完成すべく、盛夏八月の候を、驛遞馬車に搖られて、外厚い冬外套に身を固め、眞夜中の深林を馳走しつゝ、寒氣に耐え兼ねて、部落の山家に火を焚いて暖を取るといふ、深刻極まる避暑旅行をつゞける等、すべて野戰的の經過を繰り返したのである。嗚呼難い哉…勞働畫家のこの仕事。

◇

大正九年、最終の一日は、堅氷と烈風に戰ひつゝ、九州雲仙岳踏査に終了し、明くれば大正十年、此の年も亦前述の如く『鐵道旅行案內』挿繪執筆のため、製作期間五箇月を費して、つぶさに辛苦を重ねたのであつたが、豫期成績の半途をも滿さず、遺憾此上もない次第であつた。然も世人は是を迎ふるに多大の稱讃を以てし、一年有半にして、四十餘版を重ぬるに至つたのである。

大正十一年新春劈頭、東京平和博覽會へ鐵道省より出品の『日本を中心とする世界交通大鳥瞰圖』揮毫の命をうけた。是れは天地一間半、長さ八間といふ尨大な作品で、とても是れを收容して執筆する場所がなく、大に苦しんでゐる時、偶々淺草傳法院に在る天台宗總務、大森亮順師の俠助を得て、傳法院の本堂を畫室として提供せられ、遂に此の大作を完成するを得たのである。此の大作に引つゞいて、時の鐵道大臣より、御來朝中の英國皇太子殿下へ獻上の『瀨戶內海繪卷』並に日本旅行倶樂部より獻上の『歡迎和歌繪卷』（和歌—尾上柴舟博士筆）の二卷を謹筆するの光榮に浴した斯くの如くにして私の仕事は、國際的儀禮の大任、當るを得、英國皇太子殿下より感謝と讃辭の御言葉を賜つたこと、思へば身に餘る光榮にして又、此年十一月には今上陛下四國御巡遊に際し、二荒伯爵に隨行して鳳駕に供奉し奉りたる事共、思ひ合せて私は常に感泣を禁じ得ないものである。

◇

大正十二年以降、現在に至るまでの足跡は、世人の記憶に新しいことでもあるから、是れを省略して、最後の結論に向ひたいと思ふ、但し私として忘る能はざる數々の仕事は、此の年以降次第に激增して、中にも今上陛下御外遊記の裝幀を謹筆し奉り、又大正天皇御成婚記念としては『高千穗名所圖繪』を謹筆献上し『比叡山四明ケ嶽山頂鳥瞰圖』は是を瑞典皇太子殿下に奉献する等、幾多の名譽を重ぬる内、曩に出版せられし『鐵道旅行案内』改訂に當り、再び裝幀と挿繪全部の執筆を蒙り、是を完成したのである。殊に先年（大正十年）日本郵船會社より日支航略案内として發刊せられし、雲仙名所圖繪には、特に

Darwin by Mr. Hatsusaburo Yoshida, Populary known as the "Hiroshige" of Present age

と紹介せられ、私の責任も世界的に漸く重大となつたのであるが、私は既に當代の廣重を以て諾んぜず、曾ては私に冠せられし大正廣重の名を潔ぎよく江湖に返還すると共に意氣に於ては昭和に於ける超廣重の覺悟に立脚し更に一層の努力と苦心を以て、現在、滿洲、支那、朝鮮方面の各圖繪を執筆研鑽しつゝあるのである。

三　構圖上の苦心と將來への抱負

私の過去の業蹟は略々以上で盡きる。思へば夢のやうな、旅から旅への十七年であつた。直路たゞ一日の如く邁進を續けて來た今日かへりみれば實に思ひ出は盡きないのである。以下此の論の終末をむすぶべく、近世名所圖繪製作上の用意とか苦心とか云ふべきものを一通お話致したい。

一枚の圖繪が諸什の御手に入るまでには樣々な經過を取り來つてゐるのである。即ち

（一）實地踏査寫生　（二）構想の苦心　（三）下圖の苦心　（四）着色　（五）裝幀、編輯　（六）印刷

大略右の樣な階梯を經て、世に公表出版せられるのであるが、其の内、實地踏査寫生の辛苦に就ては、前に一寸述べておいた通り屢々身命を賭するやうな危險に遭遇することも一再ならずである。而し是れは常に細心の注意をさへ拂つてをれば、必ず防げることで、其れも習ふよりは慣れろ、經驗をつむに從つて危險にも慣れ、用意も周到になつて、幸ひ今日まで無事活躍してゐる次第である。殊に私の寫生は、手で描くのではなくて足で描き、頭で描く繪であるから、其のホールビューを握る爲には、ある一地點の中心と思ふべき所を、スバヤク捕へねばならない、是れは構圖に於ても同樣で、常に一つの中心を定めて、是れに基礎を置き、更に部分的のスケッチを幾百枚こなく集め、是れを全交通にあてはめて、始めて山水の布置が決定せられるのである。是れが假りに平面圖を立體的鳥瞰的に再現するのであれば、其の骨組の根本は、自然のまゝの山水布置にあるのであらうが、私のは決して然うではない。從つて私の作品に於ては、必要と思はれる中心点が、隨所で擴大されて、他は其の交通關係を示しつゝ、全体の調子を繋いでをるに過ぎないのである。